様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２７３６

研究課題名（和文）ハワイ・クレオールの文法的変異の社会的及び言語内的要因

研究課題名（英文）Social and linguistic factors constraining grammatical variability in Hawaii Creole

研究代表者
井上　彩（Inoue, Aya）

愛知県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：９０６３４９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では英語系クレオール言語であるハワイ・クレオールの共時的変異を過去時制標識と補文標識に注目して分析し、その社会的・言語的要因を探る。過去時制標識については社会的要因の影響だけでなく、言語内的要因の傾向から、ハワイ・クレオールに特徴的な音韻環境との相関を実証することができた。補文標識については、大きな傾向としては話者内の変異がほとんど見られないことがわかった。また一部の話者には義務・願望表現が過去時制で使われる時にのみ例外的に変異が観察されたが、この現象は標準英語との長年にわたる接触による隠れた脱クレオール化を反映している可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、量的な実証研究がまだ少ないハワイ・クレオールの文法的変異のうち、過去時制標識、補文標識の変異に注目して分析した。音韻的な特徴との強いつながりや、標準英語から影響を受けたクレオールの使い方といった現象が見られた。これら二つの文法的特徴は他の英語系クレオールでも頻繁に共通してみられる特徴であるため本研究の成果は今後の世界中に散らばる英語系クレオールの比較研究に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：This research project primarily analyzes variability of the two grammatical features in current Hawai‘i Creole speech; past-tense marking and tu/fo infinitives. The analysis of the past-tense marking suggests strong correlation with phonological environments characteristic of English-based creoles. In terms of tu/fo infinitives, the analysis suggests there are very little inter-speaker variability. Furthermore, detailed analysis of the exceptional cases with variability suggests the case of covert decreolization (Siegel 2008) where the form of creole (fo infinitive) remains, but the way it is used is on the model of the lexifier (Standard English). The two grammatical features are also observed in many English-based creole languages, thus, the implication of this project may also be applied to the study of other English-based creoles and contact-induced English varieties.

研究分野：ピジン・クレオール言語学

キーワード：ハワイ・クレオール　文法的変異　言語接触　過去時制標識　補文標識　言語変異　言語変化　言語態度

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

米国ハワイ州で使用されているハワイ・クレオール (HC) は 20 世紀初頭にハワイ諸島で成立した英語を語彙供給言語とするクレオール言語である。他の英語系のクレオール言語や接触言語と比較して成立時期が遅く、言語的社会的資料が入手可能であること、また主要な基層言語が大きく異なることからクレオール研究の理論的探究に重要な役割を担っているが、実証的研究、特に量的な分析を用いた研究はあまりなされてこなかった。本研究では Bickerton and Odo (1976), Bickerton (1981), Velupillai (2003), Roberts (2005), Sakoda & Siegel (2003, 2012) らによる文法的側面の記述的研究の集積に基づいて、HC の文法的変異の記述と分析への貢献を試みる。他のクレオールと同様に HC にも成立時から通時的・共時的に多大な変異が見られる。変異の要因として話者の社会的属性、言語内的環境が指摘されているが現在共時的に使用されている HC は必ずしも HC 固有の特徴を備えたものではなく、変異を検知・観察することは容易ではない場合も多い。本研究では変異の記述を試みると同時にまた、そのための効果的な研究手法の選択や考案も並行して行う。

これまでの研究代表者の研究においては、コピュラ動詞と過去時制標識の変異が言語内的な環境と言語外的な要因とどのように相関するかを変異理論の手法を用いて分析してきた。

過去時制標識の変異がどのように実現されるかは動詞の意味的カテゴリーとは何ら相関を示さず、むしろ形態的カテゴリーと強い相関を示した（形態的カテゴリーとの関係は Labov (1990[1970])にも指摘されている）。また話者の社会的な環境・条件とどのように相関するかに関しての分析では、話者の性別と年齢が有意であった。

補文マーカー標識の変異については Bickerton and Odo (1976), Sato (1985), Siegel (2008), Roberts (2005) により記述されてきたが、量的な分析に基づいた議論や分析はまだなされていない。

２．研究の目的

このような状況をふまえて、本研究では以下の 3 つの側面から HC の文法的変異に関する考察を深める。

(1) 文法的変異の記述

本研究の第一の目的は、HC の文法的変異のうち過去時制標識と補文標識の変異について変異理論の研究手法を用いて記述し、変異の要因となっている言語外敵要因と言語内的要因を探ることにある。それによって、その成立過程も、成熟期においても、常に他の言語（変種）との接触状況にあるクレオール言語の変容をかたちづくる要因はなにかをつきとめる。正書法を持たず、標準化のプロセスを経ることがなく、また威信が低いことが多いクレオール言語は、一般的言語と比べて言語変化を起こす要因の影響を受けやすいのではないかと想定できる。

(2) 言語的イデオロギー、言語意識の分析

第二の目的は HC の話者の言語的イデオロギーや言語意識がどのように HC の使用に関わっているかを分析することである。文法的変異の要因として社会的要因が関わっていることは過去の研究で明らかにされている。変異理論の手法で典型的にコーディングされる地域性、年齢、ジェンダーの他にも、数値化の難しい話者の言語的イデオロギーや言語意識がどのような点で異なり、どのような点では共通しているのかといった側面を質的な分析により明らかにすることを目指す。

(3) 方法論

クレオール言語は威信の高い大言語を語彙供給言語とすることが多く、英語、フランス語といった現代社会で大きな存在感を持つ言語と常に併存関係を強いられがちである。そのため、常に大言語からの影響を受け、多くの話者は大言語を含むマルチリンガル話者である。ハワイにおける HC の話者の場合もアメリカ標準英語との併用によるダイグロシア状況にある地域も多い。クレオール言語の共時的変異から変異の要因を見出すための方法論は、一般的な言語の変異と変化や方言接触の研究にも効果的な研究手法にもなりうるのではないかと考える。

３．研究の方法

(1) 文法的変異の記述

変異の記述のためには社会言語学的インタビュー（ハワイ州オアフ島の非都市部在住の話者２０人を HC 話者がインタビューしたもの。 *“External Influences and Internal Variation in Current Hawaii Creole English”* by Jeff Siegel (PI) and *Charlene Sato Center for Pidgin, Creole and Dialect Studies* from 2001-2002.）に現れた統語的形態的特徴を変異理論の手法を用いて分析する。分析対

象となる文法特徴は過去時制標識 wen と、補文標識 fo の変異である。

(2) 言語的イデオロギー、言語意識の分析

米国ハワイ州では、標準英語と HC（話者には Pidgin という名称で呼ばれている ）の使用が一種のダイグロシア状況のような様相を呈している。HC についての言語意識を探るために HC のメディアでの使用について話者がどのような言語態度を持つかを、インタビューにおけるディスコースを分析することによって探る。インタビューは話者に HC の使用についての認識や言語態度を直接問うメタ言語的な言説をともなうものである。

(3) 方法論

（１）と（２）の研究の過程でクレオール言語の分析に適切な方法論を模索する。また、研究代表者がこれまでに行った HC のアスペクト標識 stay の変異についての分析の方法論の紹介を方言学の方法論の研究に特化した国際学会で発表し、その有効性を問うと同時に必要な修正を施す。

４．研究成果

(1) 文法的変異の記述

これまでの研究代表者の研究においては、コピュラ動詞と過去時制標識の変異が言語内的な環境と言語外的な要因とどのように相関するかを変異理論の手法を用いて分析してきた。過去時制標識がどのように実現されるか（クレオール標識 wen の使用、ゼロ標識、標準英語と同様の形）は動詞の意味的カテゴリーとは何ら相関を示さず、むしろ形態的カテゴリーと強い相関を示した。話者の社会的な環境・条件とどのように相関するかに関しての分析では、話者の性別と年齢が有意であった。よりクレオール的な標識は男性話者に、また、高齢の話者によってより使用されている。さらに、性別と年齢を組み合わせると、若い女性話者はクレオール標識を避ける傾向にあることがわかった。

過去時制標識の変異について、形態的カテゴリーとの相関についてより注目したところ、クレオール標識である wen は不規則変化動詞よりも規則変化動詞と共起する傾向が顕著である。共起する動詞の５つの形態的カテゴリーとどのような相関を持つかについての分析を行った結果、wen は Weak (Non-syllabic-VD)および Weak (Non-syllabic-CD)タイプの動詞と共起することが多いということが明らかになった。これは、HC で /t, d/ absence が見られる音韻環境と一致していることから、 wen による時制標識は、時制の標識が曖昧になることを避けるという機能を担っていることを実際のデータに現れた動詞をカテゴリーごとに検証することにより、実証することができた。

音韻環境として/t, d/ absence が見られるのは他の英語系クレオールも同様である。Winoford (1992)はトリニダード・クレオールの使用の分析に基づいて、言語交替の状況において一般的にみられる階層的傾向を提案している。Winoford (1992)の階層によると、過去時制標識に変異が見られる場合、不規則変化動詞はもっとも活用語尾がつく可能性が高く、以下のような順で活用語尾との共起は減っていく。

Irregular > -ED > V-D > C-D (Winford 1992, based on Trinidadian Creole)

HC の場合もこの階層に沿う傾向が見られた。しかし、Winoford (1992)で分析したトリニダード・クレオールのデータではクレオール標識の関与がなく、ゼロ標識と標準英語と同様の形の対立であったため、HC にといてはクレオール標識 wen の影響が標準英語と同様の形が現れる頻度に影響を及ぼしている可能性がある。

この成果はピジン・クレオール研究のための国際学会 Society for Pidgin and Creole Linguistics で論文「Implications of variable past tense marking in Hawai‘i Creole」発表した (Inoue 2018)。しかし、20 世紀初頭に HC に特有の wen という時制標識が生まれた背景に、HC の音韻環境から曖昧になった時制標識をはっきりさせるという機能的な役割があったのではないかという仮説について実証研究を行うためには、HC が形成された 20 世紀初頭に観察された例を数多く分析する必要があり、今回の成果を論考としてまとめることと合わせてこの点については引き続き今後の課題としたい。

補文標識の分析については、変異理論の枠組みで分析をすることが適当かどうか、予備的な分析をしてみたところ、2 点において予想外の結果がでた。一つには、tu/fo の使用される頻度事態が低く、言語内的環境としてのトークン自体の数が十分でないインタビューが数多くあったことである。過去に同じデータでコピュラ動詞と過去時制標識を分析した際には十分なトークンを集めることができたインタビューデータであるが、補文標識の出現する頻度はとても少ないことがわかった。もう一点は、補文標識をある程度の頻度で使用しているインタビューであっても、話者が補文標識としてクレオール標識を用いる場合は、変異を見せることなくほぼ一貫して

クレオール標識を使用しており、標準英語の補文標識は使われないことがわかった。また、標準英語の補文標識を使う話者の場合は自らのスピーチにおいてはクレオール標識を使用しない(他者のスピーチを引用する場合は除く)。

この予想に反した結果により、データ収集の手法をそろえて年齢、性別をコントロールした参与者によるインタビューデータ（20 人分を想定）を必要とする変異理論の手法を使って補文標識の変異を記述することは断念して、本研究課題においては異なる手法を模索することとした。（この手法での分析にはカジュアルな話題について話者に自由に話してもらう社会言語学的インタビューではなく、より論理的な表現を多く含む可能性が高く、モノローグを多く含むようにコントロールされたインタビューデータを長時間分収集することができればあるいは可能になるかもしれないが、現段階においては研究代表者はそのようなインタビューデータを入手することはできない。）適切なコーパスを検討した結果、補文標識は書き言葉においてより安定した頻度で使用されることから、世代の異なる作者によって HC で書かれた文学作品に現れる補文標識の使用を量的に分析した。

分析の結果、書き言葉においても、話者が補文標識としてクレオール標識を用いる場合は、変異を見せることなくほぼ一貫してクレオール標識を使用しており、HC の補文標識は、コピュラ動詞や過去時制標識などの他の文法的な特徴とは異なり、同一の話者が異なる標識を使用することはほぼなかった。しかし、話者内の変異が見られないということが多くの話者に一般的に見られる現象だとすると、そのことはクレオール連続体をめぐる理論的な問いに大きな意義を持つこととなる。

しかし、100%変異が観察されないというわけではなく、例外的に変異が観察された事例を詳細に分析すると、より若い世代の作者の使用例には義務・願望表現が過去時制で使われる時にのみ例外的に変異が見られるということがわかった。この例外的使用は一見、より若い世代の作者がこれまでの HC 文法ではクレオール標識 fo が使われてこなかった環境でもクレオール標識を使うようになっているかのように見える。しかし実際には過去の義務を表すクレオールモーダルの haedtu を使う代わりにこれを再分析 (reanalysis) して、さらに tu の部分を fo と置き換えていると分析できることから、クレオール標識を標準英語の to と同機能のものであるとみなして本来の fo の用法よりも拡張的に使用した現象であるとみられる。この現象は隠れた脱クレオール化（Covert Decreolization）の一種である言語変化が現在進行中であることを反映しているという可能性を指摘することができる。補文標識に関する分析の成果をまとめた論考「The use of fo complementation in current Hawai‘i Creole」(Inoue 2022) は国際的な編著書『World Englishes and Creole Languages Today Vol. 1』に収録された。補文標識の変異は HC だけでなく多くの英語系クレオールに見られる文法的特徴であるため、この成果は HC の補文標識についての理解を深めるだけでなく他の英語系クレオール言語の補文標識の変異との比較検討の可能性を開くものである。

(2) 言語的イデオロギー、言語意識の分析

言語的イデオロギーおよび言語意識がどのように HC の使用に関わっているかの分析については、HC のメディアでの使用に関する話者の言語態度を話者のインタビューデータから分析した。インタビューはホノルルのあるオアフ島よりも HC がよく使われているカウアイ島で 2005 年に行われたもので、話者に HC の使用についての認識や言語態度を 直接問う、メタ言語的な言説をともなうインタビューである。メディアにおける HC の使用に関しては都市部の若い話者によるとても肯定的な言語態度が一貫して見られた先行研究も存在するが、本研究では話者のディスコースの分析はメディアでの使用についての 言語態度は一貫したものではないことが具体的に示された。どのようなメディアなのか、またそれぞれのメディアが対象とする潜在的視聴者が誰なのか、メディアが HC を使う目的がどこにあるのか、また 使われている HC は使用される文脈に適した真正 (authentic) なものなのか、といった様々な基準から肯定的なまたは否定的な言語態度が判断されているということを明らかにした。より具体的には、対象とする視聴者がハワイ州の住民であり、また真正なスピーチであれば HC の使用は適切であると判断されることが多いが、潜在的視聴者としてアメリカ全土の視聴者が想定される場合は、たとえ真正なスピーチであっても使用が適切でないと判断されることもあった。また先行研究と比較して都市部と都市部以外の話者は言語態度が異なっており、また年配の話者の中にはメディアでの HC 使用そのものに対して一貫して否定的な判断をするものもいた。この分析の成果は論文「Linguistic attitudes toward the use of Pidgin (Hawai‘i Creole) in the media」(Inoue 2019) としてまとめ、研究代表者の所属大学紀要で公表した。

(3) 方法論

現代の HC のスピーチに頻出する文法的特徴についてはインタビューデータを分析することによって変異を観察することが可能である。しかし、クレオールの典型的な文法特徴として顕著であるがために現在の自然な会話では使われる頻度の低い文法標識は変異を記述することが困難である。こういった文法特徴を分析するために、文法性判断に関するインタビューを利用することによって、話者の文法性認識における変異を研究することができる。使用頻度の低い文法的

特徴についての変異を記述するための方法論として、文法性判断に関するインタビューを活用して文法性の認識における変異を分析する方法について、方言学研究の方法論に特化した国際学会 Methods in Dialectology XVI で研究発表「Analyzing variation in perception grammar of non-standard language: a case of Hawai‘i Creole」を行った (Inoue 2017)。母語話者に HC の文法について質問した質問票の結果とインタビューを分析することによって、話者が文法性について持っている認識における変異と、実際のスピーチに現れる文法の変異とのずれ（また一致）についても考察を深めることができた。

今後も引き続き HC の使用について様々な研究手法を用いて言語そのものの記述だけでなく変異の諸相と話者の認識についても考察を深めていきたい。まず、本研究課題で行った HC の文法的変異の分析は今後も続けていく予定である。文法性判断に関するインタビューによって、現在では頻繁に使用されなくなった文法標識についての話者の認識の変異をとらえることができることが分かったので異なる地域で収集したインタビューデータを比較して、文法性判断の認識に関する社会的要因（地域差、年齢差、性差）の分析を試みたい。また、HC の使用が話者の語彙認識にどのような影響を与えているか、また HC の複数の正書法に対する話者の反応時間の違いについても研究を進めている（課題番号 21K00506「ハワイ・クレオールにおける視覚的語彙認識」）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Inoue Aya	４．巻 第48号
２．論文標題 Attitudes towards the Use of Pidgin (Hawai ‘ i Creole) in the Media	５．発行年 2019年
３．雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	６．最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Implication of the use of for complementation in current Hawai ‘ i Creole speech
３．学会等名 The 6th Meeting of New Ways of Analyzing Variation - Asia Pacific（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井上　彩
２．発表標題 ハワイ・クレオールの義務・願望表現の変異について
３．学会等名 東京大学言語変異・変化研究会@駒場第25回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Variation of infinitive markers in current Hawai ‘ i Creole
３．学会等名 社会言語学ワークショップ「言語接触と言語変化：ハワイの事例より」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Linguistic Attitudes towards the Use of Pidgin (Hawai‘i Creole) in the Media
３．学会等名 日本メディア英語学会第8回年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 井上　彩
２．発表標題 メディアでのハワイ・クレオール： 話者のインタビューを手掛かりに
３．学会等名 北米エスニシティ研究会2月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Describing 'for' complementation in current Hawai‘i Creole speech
３．学会等名 Symposium English in Contact（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Analyzing Variation in Perception Grammar of Non-Standard Languages: A case of Hawai‘i Creole
３．学会等名 Methods in Dialectology XVI（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aya Inoue
２．発表標題 Implications of Variable Past Tense Marking in Hawai‘i Creole
３．学会等名 Society for Pidgins and Creole Linguistics (SPCL) 2018 Annual Winter Meeting（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Aloysius Ngefac, Hans-Georg Wolf & Thomas Hoffmann (eds.)	４．発行年 2022年
２．出版社 Lincom Europa	５．総ページ数 -
３．書名 World Englishes and Creole Languages Today. Vol. 1: The Schneiderian Thinking and Beyond" (LINCOM Studies in English Linguistics 24)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	シーゲル　ジェフ (Siegel Jeff)		
研究協力者	サコダ　ケント (Sakoda Kent)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 Sociolinguistic Workshop: Language Variation and Contact in Hawai'i	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関